地域活性化の拠点として人々で賑わう JAちちぶの施設跡地

── 直売所は市民交流、支店はワーケーションの場に ──

理事研究員　重頭ユカリ

1　始まりはJA直売所の跡地から

埼玉県秩父郡横瀬町では、2016年９月から、企業・団体・個人が持つアイディアを町とコラボレーションして実験する「よこらぼ」という地域活性化プロジェクトをスタートした。当初は町役場の会議室で打合せやワークショップを行っていたが、活動が活発化するにつれ、スペースの問題が生じた。そこで白羽の矢が立ったのが、横瀬駅から徒歩10分ほどで、町民会館等が並ぶ町の中心部にあるJAちちぶの横瀬直売所跡地であった。横瀬支店に隣接していた同直売所は17年10月に、近くに新設されたアグリマルシェよこぜに移転し、空いていたのである。

改修費は町が負担することになったが、旧直売所の米びつや棚などの備品も生かしつつ、町職員、地元の職人や住民、そしてJA職員も協力してDIYを主に改修が行われ、費用は最小限に抑えられた。約120㎡のスペースは、役場（やくば）をもじって「Area898」と名付けられ、19年４月にオープンした。「よこらぼ」の拠点としてだけでなく、木曜日から月曜日（祝日除く）の10：00～18：00は一般にも開放され、仕事や勉強、少人数での打合せ等に誰でも無料で気軽に立ち寄ることができる。

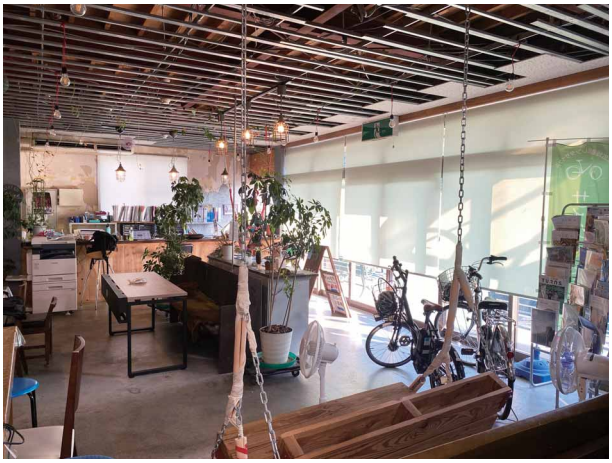

写真　Area898の一角（農中総研撮影）

JAは、直売所が移転することで町の中心部への人の流れが減り、空洞化することを懸念していたため、このように活用することは活気を維持することにつながると考えた。

2　直売所に隣接する横瀬JA支店の再編

JAでは、店舗の効率的な運営や機能強化のため本店の移設や支店の建替え、再編などを進めている。そうしたなかで横瀬支店はふれあいプラザ化し、業務は近くの本店に統合することとなった。ふれあいプラザは他のJAではよりそいプラザと呼ばれることもあり、信用取引勘定を持たず、少数の職員がATMの操作案内や業務の取次ぎのみを行う店舗類型である。

ふれあいプラザ化により支店の業務スペースだった部分の多くは空くことになり、そのスペースをワーケーション施設として活用しないかという話が横瀬町からJAに持ち掛けられた。

3　町・企業と連携しワーケーション施設が誕生

横瀬町は、ワーケーション施設を運営する株式会社LIFULLと連携して、地方創生テレワーク交付金（注）の活用を検討しており、その場所として横瀬支店跡地を活用することをJAに21年１月に相談した。同交付金は、内閣府が地方創生に関する20年度第３次補正予算枠に計上したものであり、新型コロナウィル

農林中金総合研究所
https://www.nochuri.co.jp/

ス感染症の克服と経済活性化の両立の視点を取り入れ、デジタルトランスフォーメーションを推進しつつ、東京圏への一極集中・人口減少・少子高齢化という大きな課題に対応することを目的としていた。

前述のとおり、JAでは町の中心部の活気を維持するためにも横瀬支店の跡地活用は重要な課題として認識していたため、交付金の申請期限まで半月ほどしか時間がないなかで、総務部を中心に組合内の合意形成を行った。３月に交付金が下りることが決まり、同年10月にはJAちちぶ、横瀬町、(株)LIFULLの三者で「地域活性化に関する連携協定」を締結した。その目的として掲げたのは、支店跡地施設を横瀬町内外の人のために有効再活用し、横瀬町らしい、多様な人たちがつながる交流と賑わいの場を作ること、関係人口の創出、さらには広く秩父地域の活性化につながる取組みを推進することである。

交付金は国から町に交付され、横瀬支店の改修費として町からJAに交付された。交付金の対象とならない一部の改修費はJAが負担した。そしてその施設をJAから(株)LIFULLに有償で賃貸し、同社が国内各地で運営するワーケーション施設LACとして運営している。

22年５月にオープンしたLAC横瀬１階には、コミュニティスペース、シェアキッチン、ワーキングスペース、会議室がある。誰でも利用できるコミュニティスペースの一画には、JAのふれあいプラザの窓口もある。２階は宿泊フロアで、個室や６つのベッドがある男女別ドミトリー、ミニキッチン、シャワールーム、ランドリーがある。宿泊施設は都度利用のほか、月額料金で全国各地のLAC施設を利用できるプランもあり、仕事をしつつ長期滞在する人もいる。

LACのマネージャーが長期滞在者に買出し先としてJAの直売所を紹介することもあれば、ふれあいプラザのJA嘱託職員(１名)が窓口に不在の折には同マネージャーが利用者にその旨を伝えてくれることもある。Area898とLAC横瀬は仕切りもなくつながっており、JA職員と施設関係者、さらには利用者の間で、ただ場所を貸し借りしただけにとどまらない、交流が行われている。

4　日頃のコミュニケーションが鍵に

紙幅の都合で詳細は割愛するが、その後も町等との連携により、Area898の２階部分に子育て世帯向けのスペース「Area899」や木工工房「TATE　Lab.」が整備され、支店の敷地内に子どもの第三の居場所として「NAZELAB」が建設されるなど、旧横瀬支店は地域活性化に資する様々な機能を持つようになっている。

こうした動きは町の地域活性化への先進的な取組みが引き金になっているが、それに加えてJAと町の間でコミュニケーションがとれていることも重要な要素であると考えられる。過去にJAが所有する土地の処分に関してコンタクトしたことをきっかけに、JAと町はお互いに相談しやすい関係を築いてきた。このような関係性に至るには、JAでは、取組みは双方がメリットを感じられるものとすること、円滑な意思疎通のため、伝達事項や打合せ内容を文書に残しながら、スピード感をもって対応することを心掛けてきた。そのためには、JA内で理事をはじめとする組合員に対して、取組みについて情報を十分に共有し理解を得ていることも重要である。現地を訪れてみると、日頃のコミュニケーションが地域の賑わいの創出につながったことが実感できる事例である。

（しげとう　ゆかり）

(注) 2024年度分については、デジタル田園都市国家構想交付金デジタル実装タイプ(地方創生テレワーク型)となっている。